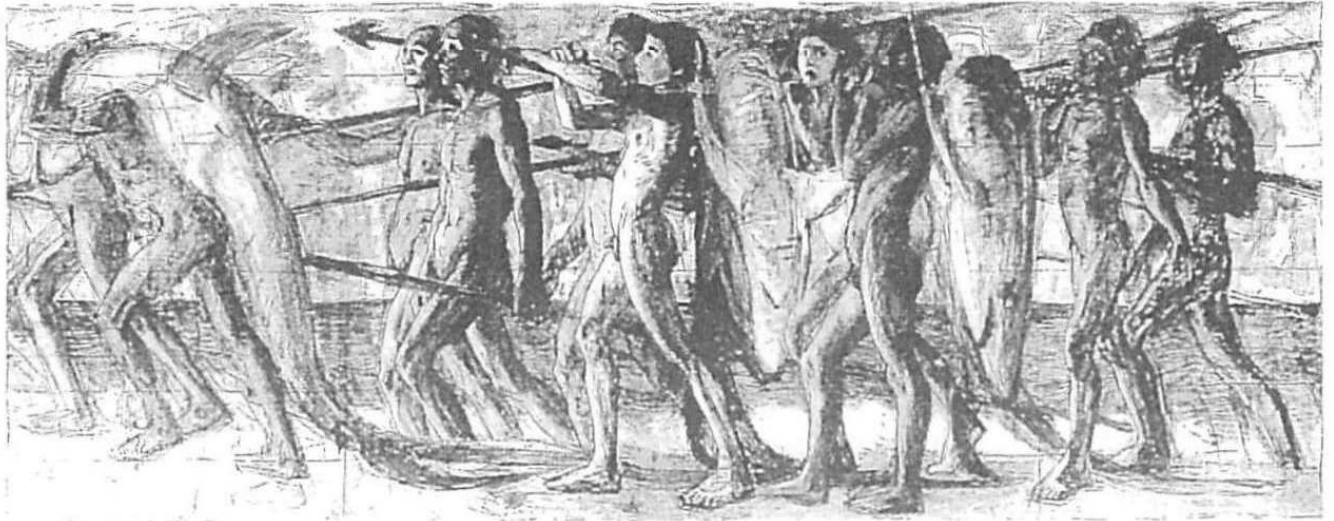


青木繁没後100年 京都・東京などで巡回展



重要文化財「海の幸」(1904年、石橋財団石橋美術館蔵)

貧困と病苦の末に夭折した洋画家、青木繁(1882~1911)。その代表作「海の幸」(重要文化財)が、京都国立近代美術館(京都市左京区)で開催中の「没後100年青木繁展 よみがえる神話と芸術」(7月10日まで)に出展されている。未完成ともされ、謎が多い本作には、イメージソースを巡ってさまざまな説がある。没後100年を迎えた今年、ブリヂストン美術館学芸員の貝塚健さんが房総の祭りに注目し、新たな説を提唱した。【手塚さや香】

3匹のサメをかつぎ、砂浜を2列になって歩く男たち。横長の画面は、原初的なエネルギーを発散する。この絵の成り立ちを巡っては青木の死

「海の幸」モチーフに新説

房総の御輿が源泉か

後、多くの研究がなされ、背景が分かってきた。

1904年の7月中旬から8月末まで、当時22歳の青木らは写生のために千葉県館山市の布良に滞在、その地で「海の幸」を描いたことが判明している。同行したのは同郷の画家、坂本繁二郎、青木の恋人の福田たね、森田恒友。青木はこの旅について友人の梅野満雄にあてた手紙に「……

とある。「海の幸」に描かれているのは、青木が布良で目撃した光景なのか。実は後はいくつかの証言から、そうではないことが分かった。証言の一つは、同行した坂本のものである。制作から60年以上を経て、坂本は自分が青木に語った水揚げの光景が「海の幸」制作のきっかけになっていると明かした。写実を重視した

坂本は「あの『海の幸』は絵としていかに興味をそそるものとしても、真実ではありません。大漁揚げの光景は、青木君は全く見ていないはずですよ」と語っている。他の関係者の発言も、坂本のそれと矛盾しない。

青木は坂本の話だけを源泉に、この絵を描いたのだろうか。これまでに、先行する西洋作品との構図の類似や、当時の広告図案との類似などが指摘されてきた。しかし貝塚

さんは、銚子を肩にかつぎ長い柄に預けるようにしてサメを運ぶさまが御輿に似ていると指摘する。

注目したのは、青木の書簡にも現れる安房神社だ。「安房神社のもっとも大きな行事である例祭が、『海の幸』の源泉の一つになっているに違いない」。例祭は8月10日に行われており、青木の滞在時期とも一致する。「安房神社

や神話に関心を持っていた青木が、この例祭を見に行かなかったとは考えにくい」と貝塚さんは言う。

「海の幸」をよく見ると、男たちの前方から光が当たっていることが分かる。現在の例祭は規模が小さくなっているが、館山市史を調べた貝塚さんは、かつて例祭の中心は相浜のお浜出であり、御輿は夕日に向かって進んでいたことを突き止めた。相浜のすぐ南にある布良から見物に出掛け、南側から御輿の担ぎ手たちを見たとなると、絵と同様に右から左へ二つの隊列が進むのだ。さらに青木が滞在した年の8月10日の館山は、晴天だった可能性が高い。「『海の幸』は祝祭的、とよく言われますが、祝祭そのものから影響を受けたものとするれば納得がいきます」



貝塚さんの新説は、青木繁展の図録に収録されている。

「没後100年青木繁展 よみがえる神話と芸術」東京展は、ブリヂストン美術館(中央区)で7月17日~9月4日に開催される。